

系図

13 尚宗	7 行朝	祖 朝宗
14 植宗	8 宗遠	2 宗村
15 晴宗	9 政宗	3 義広
16 輝宗	10 氏宗	4 政依
17 政宗	11 持宗	5 宗綱
	12 成宗	6 基宗

## 歴代伊達氏プロフィール



初代 朝宗 1129-1199

勝利の地で伊達氏の祖となった常陸国伊佐郡の豪族で、源頼朝とは縁戚関係にあたる。奥州合戦では、頼朝軍の前衛として出陣。飯坂大鳥城主の佐藤氏が守る敵の最前線基地攻略の功績で、佐藤氏の地盤で激戦地・阿津賀志山がある陸奥国伊達郡を与えられ、姓を伊達に改めた。伊達郡高子岡に居城したと伝えられている。



4代 政依 1227-1301

信仰深く、伊達五山を定めた。仏教の信仰が厚く、「京都五山」にならぶ東宮寺・満勝寺・光明寺・観音寺・光福寺を開山、のちに「伊達五山」とよばれた。



7代 行朝 1291-1348

和歌にも通じる南朝の重臣として、陸奥守の北畠顕家に仕えた。和歌にも通じており、藤原朝村の名で、『風雅和歌集』などに作品が収められている。のちに名を行宗に改めたといわれている。



9代 政宗 1353-1405

独眼竜がその名にあやかっただけ、もうひとりの政宗。父・宗遠とともに置賜の長井氏を滅ぼして、米沢を手に入れたほか、時の鎌倉公方が領土割譲を求めてきたことを拒み、3度にわたって撃退した。足利義満の生母の妹蘭庭明玉を妻とする。文武に秀で、伊達氏「中興の祖」と呼ばれる。



11代 持宗 1393-1469

梁川に移り、確固たる勢力を築いた。室町幕府の鎌倉府に反旗を翻して戦うも、後に寺社造営や反乱の鎮圧で功を挙げ、居城を梁川城に移し、梁川八幡神社を再建した。持宗から、將軍の名前を「子」をつけて庶代当主の名に「子」を慣例とした。



12代 成宗 1435-1487

献上品で、実力者ぶりを見せつけた。上洛して、足利將軍家へ砂金・馬、太刀など膨大な進物を献上した。また、東山文化を取り入れた梁川城本丸庭園を造った。



14代 植宗 1488-1565

内政強化で、戦国の世に備えた。室町幕府では前例のない陸奥国守護職に任じられた。百姓の課税について示した「棟役日記(むねやぐら日記)」、領内の法令集「塵芥集(じんがいしゅう)」、田畑の課税について示した「段銭帳(たんせんちょう)」を作成し、領国の経営を行った。勢力拡大のため、子供たちを近隣の有力武将と政略結婚させた。



15代 晴宗 1519-1578

伊達から米沢へ一族を導いた。急な改革をすすめた父・植宗に不満がつり、桑折西山城に幽閉されたことが、天文の乱へ発展した。はじめは植宗側が優勢だったが、形勢が逆転し、晴宗側が優勢になった。その後米沢城に居城を移し、天文の乱の後始末に尽力した。



16代 輝宗 1544-1585

領土を回復、息子へ未来を託した。天文の乱の影響で縮小した領土の回復のため、相馬氏と戦った。織田信長に鷹を贈ったのをはじめとして、北条氏政・柴田勝家と書簡や進物をやりとりするなど、幅広く外交活動を展開した。41歳の若さで隠居の身となるが、降伏を願い出た二本松城主の畠山義継に拉致されて落命する。



# 伊達政宗までのルーツ

初代 朝宗からたどる政宗への道。長きにわたって栄える「伊達氏」とは？



伊達者の先祖は、やはり伊達者だった！  
受け継がれるDNA  
7つのエピソード  
17代 政宗

### 武勇と智謀に優れる

奥州合戦において、両軍の睨み合いを破る勝利を挙げた初代朝宗、時の権力者に屈せず領地を守るために戦った9代政宗と伊達氏の歴史には武にまつわるエピソードも多い。17代政宗が直接指揮を執って戦った合戦数は、他の武将と比べて多いといわれ、不利な戦いを引き分けに持ち込む能力も高かったといわれている。

### 名僧の教育を受ける

政宗は、禅宗の名僧である虎哉宗元(こさいそうごん)の教育を受けて育った。仏法や漢詩などの教養のほか、一国の大將に必要な心構えやものの見方を徹底的に教え込まれたという。

### 頼りになる存在

7代行朝は、北畠顕家の家臣として、奥州の行政・司法・立法を司る評定衆(ひょうじょうじゅう)として活躍した。北朝の足利尊氏の追討軍にも参加しており、頼りになる存在だったといえる。

政宗は、3代將軍徳川家光から非常に尊敬されていたという。幕府からすれば、家康と渡り合い、最後まで天下を諦めなかった危険人物。しかし、実戦経験が豊富で、自らを將軍として見立ててくれた政宗は、家光にとって父親代わりの存在だったといえる。政宗は、將軍の前でも脇差帯刀を許されており、病床にいたときには家光自らが見舞いに来たほどだった。

### 文化人でもあった

伊達氏の歴史は、歌をはじめとして文事に優れていた。政宗も、歌・詩・書・能・茶道などあらゆる教養を身に付け、深みを増すために、京の文人とも交流を重ねていた。さらに、文化的なたしなみを諸大名との友好手段として利用していたといわれ、秀吉とは茶や能を通じて交流をはかっている。政宗が晩年に残した漢詩が「うち」。

### アピール上手

11代持宗や12代成宗が、伊達領内の数多くの献上品とともに上洛したのは、伊達家が奥州随一の実力者であることを知らしめる意図があったといわれ、武力以外のアピールもぬかりない、スマートさが見てとれる。

### 領地の整備に熱心

伊達氏の歴史は、梁川城や桑折西山城など、拠点となる城を何度か変えて、伊達家を存続させてきた。城下の整備は、その都度必須だったであろう。政宗も、仙台藩が誕生し、太平の世になってからは、運河の整備や北上川の開拓などもつばら領地の開発に力を入れた。また、上方の文化を積極的に取り入れて、大崎八幡宮や瑞巖寺などの建造物も残している。

### 伊達の三傑

政宗には「伊達の三傑」と称される、3人の忠臣がいた。幼い政宗に武芸を仕込み、後に外交・献策で支えた片倉景綱(かたぐらかげつな)。戦で先陣を切り、武功も多かった伊達成実(い達成実)。親子二代で仕え、奉行衆として行政面で支えた鬼庭(茂庭)綱元(おにわも)もこの3人である。

### 領土を回復、息子へ未来を託した

政宗が家督を相続する際に、家臣団も代替わりしているが、輝宗も能力を知る3人が周辺を固め、輝宗時代の忠臣も、引き続き伊達家を支えている。未来のため、輝宗は信頼できる優れた家臣を統制して、息子へ残したのではないだろうか。